

Title	人形及人形芝居の歴史に関する文献
Sub Title	
Author	小澤, 愛園(Ozawa, Yoshikuni)
Publisher	三田史学会
Publication year	1921
Jtitle	史学 Vol.1, No.1 (1921. 10) ,p.156- 160
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19211000-0156

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

人形及人形芝居の歴史に關する文獻

111年前のことであるが紐育の吳文炳君から、Helen Haiman Joseph といふ婦人が Marionettes に關する書籍を出さるに至つて居るところにて數へてくれた。當時、その本を丸善に頼んで置いたところが、去る五月十九日に漸く手許に届いた。かく到著の遅れたのは、昨年になつて出版せられたからである。

Helen Haiman Joseph の A Book of Marionettes

は、全篇二百四十頁餘、四十餘枚の挿繪のある美しい本である。或は學者の見て喜ぶやうな本でないかも知れない。といふのは、著者の態度が少しく學究的を離れて娛樂的であり、その材料も、特に自ら蒐集したといふよりは寧ろ先人の著作中に散見するものが多いからである。が併し、著者が

此書籍を著すに當つて、此方面の多くの書籍を涉獵し、世界各地に亘つて最近に至る迄之を記述したところに就いては、深く感謝しなければならない。Marionettes に關する書籍は、從來各國共立派な書籍が澤山出ては居るが、英語を以て書いたものでこれだけ纏つたものは未だないのであるから、此點からしても著者の勞を多としなければならない。

私はいま此書の出たのを機會に人形及人形芝居の歴史に關する西洋の書物に就いて一瞥して見たところに思ふ。

前世記の頃、佛蘭西に Charles Magnin と呼ぶ演劇史家があつた。此人は一七九三年十一月四日巴里に生れ、一八七二年十月八日巴里で歿した。珍

しる學者で、人形の歴史に關しては特に造詣が深かつた。アナトオル・フランスの如れやその學識に敬服して居る位である。“Les origines du théâtre en Europe”(1838), “Histoire des Marionnettes en Europe”(1852) の二つの名著があるが、殊に、後者は、最も權威ある著書となつて居て、後世人形の歴史に就いて筆を執るものでこれに據らぬものは殆どない位である。先づ古代埃及、希臘、羅馬より筆を起し、中世に及び、近代に至つては、伊太利、西班牙及葡萄牙、佛蘭西、英吉利、獨逸等に亘つて精細に記述してある。七年も前に出た本であるから、今日では容易に得られない珍本である。

P. Ferrigni の “Storia dei Burattini” も亦人形の歴史に蘊する權威ある書籍である。著者は書いて『忠太利の「ヨリック」』と呼ぶ。“Yorick”なる non de plum を用ひ、永年の體、Florentine Nazione 講の演劇批評家として、盛名のあつた人である。Rivista Europea 講の如きは、一八八〇年、其意見を述べし、若し Nazione 講上に永年發表せられ

た Yorick の論文や批評を蒐集するものがあるならば、伊太利演劇史上に大なる貢獻をなすものであると言つた。

Yorick の著書は Magrin に負ふところが多いといふことであるが、併し、各國々のあらゆる大家の著述を讀破して材料を得、大なる努力と苦心との結果成つたものである。其材料を取扱ふに當つても、極めて公正なる態度を持し、假初にも自己の諭想を加へる如れりとしなかつたといふことである。先づ、古代の神殿、家庭、劇場の三項に分ちて論じ、埃及、希臘、羅馬より中世に及び、更に伊太利、西班牙、英吉利、獨逸、佛蘭西等の各國に亘りて詳細に記述してある。

この書の英譯は、Gordon Craig 君が伊太利のフロオレンスで發行して居る Mask の一九一二年以後に連載せられて居るが、まだ纏つた譯本にはなつて居らないらしい。

前記の一書に比すれば、至つて小冊子ではあるが、Richard Fischel の著書に、Die Heimat des Puppenspiels (1900) がある。これは同教授の講演

筆記であつて、一九〇一年に Mildred C. Tawney の英譯が出て居る。本文註釋共総に三十一頁の小論文ではあるが、専門の見地より印度及東洋各地のいわゆる就いて論じて居る點は参考めたるに少くない。

William Hone(1780-1842) の “Ancient Mysteries” (1823) は、英吉利の往時の人形芝居のいわゆる記述せられたるが、Punch and Judy の歴史に關しては、特に John Payne Collier(1789-1883) の “Punch and Judy” (1881) が出て居る。此書はパンチに関する最も權威ある書籍で、George Cruikshank の描いた多くの挿絵が、更に光彩を添へて居る。伊太利に於けるパンチの起源から説かれて、英吉利に於ける人形芝居の起源及發達、パンチの到着、パンチの性格等に至る迄精しく論じてある。

英國の入形芝居に關しては『大英百科全書』や『新萬國百科全書』にも大略出でて居るが、是等の記述は多く前記の著書に據つたものである。

ケムブリッヂ大學の老教授 Sir William Ridgeway 先生は、人も知る如く、考古學並に人類學の大

であるが、先生の “The Dramas and Dramatic Dances of Non-European Races” (1915) の中には歐羅巴以外の人種の中に行はれて居る人形芝居のいわゆる繪細に記されてある。併し、これには歴史的記述が多し。けれども、民族心理學的立場から未開人の演劇を研究するには最も必要な著書であつて、此種の書にはヒューマ大學の Loonis Haveymeyer の “The Drama of Savage Peoples” (1916) も大に参考にならるべ。

佛蘭西には人形芝居に關する書籍が何より出で居る。其内人形の歴史に關する主なるものは、Magnin の著書の外、Tancrède de Visan の “Le Guignol Lyonnais” (1910) 及 Ernest Maindron の “Marionnettes et Guignols” (1900) がある。前者は “オカルの起源及變遷、人物の性格等に就いて記したもので、總が百頁餘の小冊子であるが、後者は人形の歴史に關する四百頁近い、の浩瀚な書籍で、予の藏書中に於ける最も大切な書籍の一つである。先づ、古代、中世、外國(莫吉利、獨逸、西班牙及葡西牙、白耳義、土耳其、支那、

瓜哇、緬甸)、佛蘭西、伊太利に大別して記述し、佛蘭西と伊太利とに關して最も力を注いである。數十葉の挿繪はまた珍しいものばかりである。

Larousse にも亦 Marionettes の歴史に關する概略の記事がある。

ヨーロッパ大學の Brander Matthews 先生は、劇文學者として知られ居るが、先生の “A Book about the Theatre”(1916) など、Punch や Puppet-play や Shadow-play とに關する論文がある。種々の讀んで爲になる。面白く、氣の利いた議論であるが、歴史に關する方の、これは、特に先生が自ら研究せられたところではなく、先人の著書より抄録したものらしいと思はれる。例へば、バンチに關するりかせ Collier の著書を、Puppet-play に關する Pritchard's Scribner's Magazine (一九〇九年) に出て居た Ernest C. Peixotto の “Marionettes and Puppet Show” や、Shadow-play に關しては前記 Maindron の著書を主として参考にして筆を執られたやうに思はれる。

尙、人形の歴史に關しては、數年以前露西亞か

ら出た『アボロン』誌上に長論文のあつたことを讀えて居るが、多くの珍しい挿繪を見るにつけても、露語の讀めないことを痛く悲しく思つた。

英米の諸雑誌にも人形に關する記事のなかに其歴史に就いて記したものがあつたことを數多く覺えて居るが、いづれも前記の諸書より抄録したやうなものばかりであつた。併し、ガルデン・クレエグ君が主筆となつてゐた Mask や Marionettes には、人形芝居の歴史に關する有益な記事が澤山に出て居て、是等はすべて演劇史家にとつて参考となるべきものばかりであつた。

人形芝居に關する論文、例へば、アナトオル・フランス、アアサアシモンズ、ジュウル・ルメエトル、ゴルドン・クレエグ等のものを始め、現在世界の人形芝居に關する著書及戯曲の臺本を舉ぐれば、汗牛充棟も啻ならざる程であるから、是のことについてには、他日別に稿を起すこととして、茲には述べない。

尙、獨逸には上記 Pischel 教授の著書以外に、人形芝居に關する論文も臺本も澤山に出て居るが、人形及人形芝居の歴史に關する文獻 (小澤)

殊に『人形芝居』に關しては、一
九二一年七月織行の Die Kunst に Georg Jacob
Wolf の Das Marionetten-Theater Münchner Künst-
ler、一九二一年十一月織行の Velhagen und Klasings
Monasheste に Willy Rath の Das Marionetten-
Theater Münchner Künstler なる論文がある。其他
支那本に關する英獨人の論文も少くないが、是
等には誤謬が多くやうに思はれる。人形及人形芝

居に關する和漢の書籍に就いても、列舉して解説
する積りやおつたが、餘白がないので遺憾ながら
筆を擱くゝるに至る。（大正十年九月廿一日稿）

小選愛園